

2026年9月
編集長：中里美郷

目次

第5回定期総会＆対話イベント
実践！「おずおずダイアログ」
長野県知事選候補者アンケート
さらば原発集会in松本

おずおずダイアログ

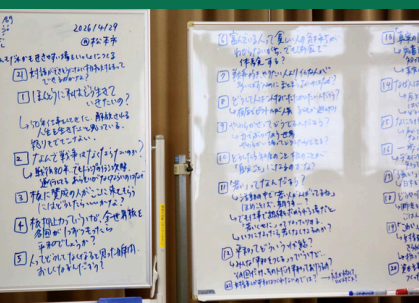
政治や社会のことについて、手のひらサイズの問いを立てて、ここならいてもいいと思える場を一緒に作りながら、おずおずと語り出してみる対話の場です。考えをぶつけ合ったり、急いで答えを出そうとするのではなく、互いの声をききあうことを大切にします。

第5回定期総会＆対話イベント開催
「みんなで語ろう『暮らしと核』」

2026年4月29日に、長野反核医療者の会の第5回定期総会を松本市にて行いました。記念イベントとして、「みんなで語ろう『暮らしと核』」をテーマとして、作家で哲学者の永井玲衣さんをお呼びして、「おずおずダイアログ」を実践しました。

永井さんをお呼びすることになった理由は、私たち、長野反核医療者の会の事務局メンバーの中で「やっぱり対話って難しい」「対話は大切だけど、苦手かもしれない」という話がよく上がっていたからです。今までいろいろな場面で対話をする企画を行ってきましたが、その度に「沈黙が生まれたり気まずい」「うまく喋らないと」「参加者みんなが均等に話せるようにしないと」「マイクを独占してしまう人がいたらどうしよう」という不安や責任感、申し訳なさなどがつきまとうてきたからです。なので今回も、ワクワク半分、ドキドキ半分でイベントが始まりました。

当日の参加者は、会場に50人、オンラインで15人。なんとこの60人以上が輪になって、全員一緒に「対話」をしてみる試みでした。永井さんから「対話はききあうこと」「話の終わりは自分で決めていい」などの約束が共有された後に、一人一人が「その場限りの名前」を声に出しました。「二度寝」「シャンプー」「わらびとり」など理由を聞いてクスッと笑えて、初対面同士なのに癒される時間でした。その後、前半は「問い出し」をしました。「暮らしと核」から思い浮かぶ問いをおずおずと出していきました。「どうして人はこんなに戦いたいんだろう」「平和ってどういう状態だろう」…。さまざまな問いが20個出された後、みんなの多数決で「強いっていいことなのかな？」の問いに決まりました。後半は、問いについて思うこと、考えることを、話してみたい人が話してみる、みんなはじっくり耳を澄ますという時間でした。



<1面の続き第5回定期総会 & 「おずおずダイアログ」>

ダイアログが始まってみたらあら不思議！いつもの不安やドキドキがすーっと消えていく感覚がありました。参加者の方々の感想も素敵だったので抜粋します。「対話としつつも、たくさんの人の話を聞いた気がします。こんなに人の話を聞いたのは久しぶりです。後半は少し脳が疲れました。でもとても有意義な時間でした」「何を言ってもOK、途中でわからなくなってもOK、結論を言わなくてもいいと言っていたので、安心感がありました。みなさんのお話をお聞きして、たくさんの『なるほど』があり、あっという間の時間でした」「答えや到達点を求められないので、何を言ってもいい、発言しなくてもいいというスタンスの空気感がとても居心地がよかったです」「『沈黙を聴く』という言葉で、とても楽になりました。



ふだん常に『速く』『的確に』『意味のある』ことを提示することが求められ、話す(議論する、発表する)場では、『にこにこ』『わかりやすく』話さなければならないことが、自分では意識しないままに、なかなかしんどかったんだな、と気づきました」「初めてお会いする方が大半にも関わらず、『この場なら話しても大丈夫』と思える貴重な場でした。話を聞いて、自分の内面と向きあい、色々な感情が湧き上がってくるのを感じました。涙が出てきそうな時もありました。とても内容の濃い話で、でも心地良い空気感をまとっている対話の時間でした。争いの続く国々の間で、こんな対話が作り出せれば、解決への道は拓がるように思います」。

参加した皆さん、一緒に対話の場所を作ってくださいありがとうございました。そして今回参加できなかった皆さんも、「強いていいことなのかな？」の問いについて思ったことがあったら、ぜひ教えてください。この心地よく丁寧な対話の実践を、これからも続けられるようにしていきたいです。

(河野絵理子：事務局メンバー)

実践！おずおずダイアログ

2026年8月11日、長野県民医連の会議室にて、「おずおずダイアログの振り返り会」を行いました。4月29日の総会で行った、永井玲衣さん主催の「おずおずダイアログ」がとても興味深く、自分たちでもやってみよう！という思いでした。

おずおずダイアログの秘訣は、人の話を聞くこと。「他の人の話を遮らない」「沈黙もその人の時間」「話終わりは自分で決める」など。

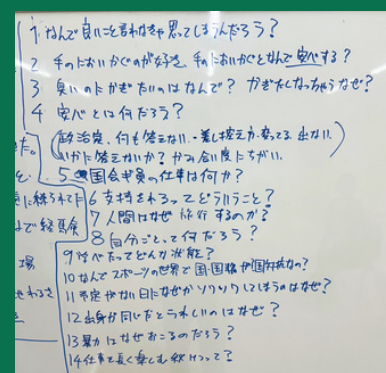
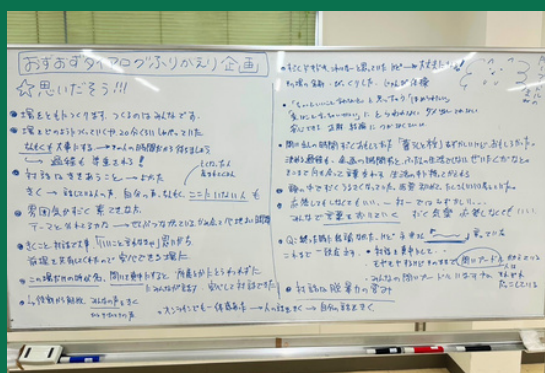
他の人の話を聞いていると、「それ分かる！」とか「この前似たようなこと思った気がするけど何だった？」とか、いつの間にか自分とも向き合っているような感覚になりました。

「問い出し」の時間では、速すぎる現代社会の中で普段は考える時間もない、ふとしたモヤモヤを出し合います。ゆっくり時間をかけて皆で考えると、モヤモヤが止まらない！止まらない！

忙しい日常の中で、無意識的に自分の声を無視していることってたくさんあるんだなあと感じました。もっと自分を大切にあげよう。

永井さんは、「対話は脱暴力の営み」と言います。時間をかけて、自分のこと、相手のことに丁寧に耳を傾ける作業は、今この世界にこそ必要なものかもしれませんね。差別、偏見、分断、争いの絶えない世界を観るとやるせない気持ちになりますが、まずは自分の周りから、平和の種を撒いていきたいと思っています。また次の機会があれば、皆さんもぜひご参加ください。お待ちしております。

(事務局メンバー：伊東元親)



長野県知事選候補者アンケート

2026年8月9日に行われた長野県知事選挙に向けた候補者アンケートを実施しました。

長野反核医療者の会のほかに、ジェンダーを考える長野県民の会、松本強制労働調査団、共生長野県民の会、県民有志(個人)が質問を作成しました。

阿部守一さん、武田良介さん、2名の候補者から回答をいただき、7月23日に結果を公開しました。

7月24日に行った「回答を読む会」には、長野反核メンバー6人と、SNSを見て興味を持ってくださった方2名が参加しました。話し合ったことを紹介します。



結果全文は長野反核医療者の会のホームページからダウンロードできますので、ぜひご覧ください！

質問1：核兵器禁止条約（TPNW）

長野県議会が「日本政府にTPNWへの署名・批准を求める意見書」を2度可決していることを踏まえて、当選後、知事としてTPNWへの政府の署名・批准をさらに働きかけることに賛成か聞きました。



阿部さん

どちらかといえば賛成

核兵器のない世界は人類共通の願いです。廃絶には核保有国を含む全ての国の合意が不可欠なため「どちらかといえば賛成」としました。平和教育や被爆体験の継承に取り組み、ヒバクシャ国際署名にも署名しています。



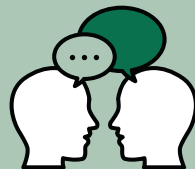
武田さん

賛成

日本政府は唯一の戦争被爆国として核兵器廃絶を主導すべきです。TPNWの早期批准を国に求め、締約国会議へのオブザーバー参加を知事会で提案します。

【回答を読む会で話し合ったこと】

- ・核保有国と足並みを揃えるって、いつになるの？
- ・日本がTPNWに入ったら、アメリカとの関係は悪化するの？100の参加国との関係が良くなると思う。
- ・県議会が意見書を可決しているのに、知事は食い違うことは良くある。
- ・知事会に要望として提出するのを知事会長としてやってほしい。



質問2：被爆者援護

被爆者への援護策の一つとしての、介護保険利用助成制度（介護手当、家族介護手当など）が周知されず利用者が0人であることを示しました。その上で、2世3世も含む被爆者援護の充実のための取り組みの促進に賛成か聞きました。



阿部さん

賛成

被爆者への支援を確実に届けることは重要です。保健所を相談窓口として案内し、今後も関係機関と連携して適切な支援につなげていきます。



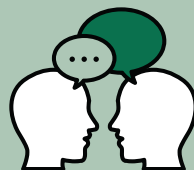
武田さん

賛成

県独自制度のさらなる周知を就任後1年をめどに検討し、国には高齢化を踏まえ、認定制度の早急な改善を要請します。

【回答を読む会で話し合ったこと】

- ・介護は高齢者にとって「今まさに必要」な切実な生活の問題。
- ・2世3世も含めた被爆者の健康不安、被爆者のアイデンティティにどう寄り添うか、それを考えていかないといけない。被爆者がいないように扱われている現状では、結局国や県が特に何もしないままに、この問題が消えていってしまう。
- ・今まで運動してきた被爆者の方が、介護が必要な段階になって、国や県に要請することができなくなっているのが今。私たち医療者や市民が求めているといけない。



質問3：憲法9条について

長野県世論調査で「必要ない」が47.4%と最多だったことを踏まえ、憲法9条の改憲についてどう考えるか聞きました。



阿部さん

どちらかといえば9条を堅持すべき

憲法改正の是非は、国会の発議を経て、最終的には主権者である国民が判断するものと考えています。知事が強い意思表示をすることには慎重であるべきですが、国民主権、基本的人権の尊重、平和主義は堅持すべきであり、「どちらかといえば憲法9条を堅持すべき」と考えます。



武田さん

9条を堅持すべき

9条への自衛隊明記に強く反対し、現行9条を維持すべきと考えます。自衛隊の海外派遣や実力行使、財政などへの歯止めとして、明記されてこなかったことに意義があると考えます。

【回答を読む会で話し合ったこと】

- ・9条をまもるは最低限のこと。「9条があるのに軍事基地がある」「9条があるのに戦争の準備してる」と、議論をその先に発展させていきたい。
- ・戦争のための準備本当にやだ。阿部さんは、もっと戦争の準備に近づいても「意思表示はできない」というのか。
- ・9条改憲は「戦争の準備につながることで、それをもっと身近に考えてみる。自衛隊の中にも長野県民がいる。その人たちが犠牲になったり、戦争で人を殺したりする可能性がある。松本駐屯地で、訓練中に人身事故があった。遺族が、訓練基準が甘かったのではないかと訴えている。戦争のために輸血や医療物資や棺を集めている。相対的に県民の健康のための物資が足りなくなる、それは命の選別になるのではないか

3.11 サラバ原発集会IN松本

3月8日に松本市で開催された「3.11サラバ原発長野県大行進」集会にて、当会の事務局メンバー2名が発言させていただきました。発言内容を会報にも掲載します。

「私たちは、どんな未来を選ぶのか」

出河 進

15年前の3月11日。テレビに映る津波の映像、その後、福島第一原発の「冷却水の水位が下がっています」「原子炉格納容器内の圧力が上がっています」というニュースを聞きました。そして原子炉建屋から白い煙が勢いよく上がる映像を目の当たりにし、「これは本当に大変なことが起こってしまった」と大きな衝撃を受けたことを思い出しています。

長野反核医療者の会は、2022年4月、県内の若手医療者を中心に結成しました。医師・医療者として、ひとたび核戦争が起これば、医学や医療では太刀打ちできない。治療できないのであれば、予防するしかない。そんな理念に共感して活動しています。核兵器だけでなく、原発事故も同じです。高線量の放射線被ばくに対しては、現在の医学でも十分に治療することはできません。また、汚染された地域に医療者が救援に入れば、その医療者自身が被ばくする危険があります。福島第一原発事故では、双葉病院など、高齢者や寝たきりの方々の避難が困難を極め、避難の中で亡くなられた方もいました。高齢者、障害のある方、持病のある方、子どもなど、弱い立場にある人ほど大きな影響を受けることを、私たちは経験しました。さらに、福島で暮らす人たちは、放射線への不安だけでなく、「風評被害を生むな」「みんなと同じにしろ」という圧力にも苦しみました。不安を口にすることさえ許されない状況は、戦前の「非国民」という言葉を思い起こさせます。

私はいま、非核三原則の見直し、武器輸出の拡大、長射程ミサイルの配備、大軍拡、そして改憲の動きに大きな危機感を持っています。ジャーナリストの柴野徹夫さんは、かつて原発労働者として原発内部に入り、そこで起きていた放射能漏れ事故を明らかにしました。晩年、病気を抱えながらも全国を回って平和や社会について語り続けました。柴野さんが人生をかけて訴えたことを、私一人で背負うことはできません。でも、仲間と少しずつ分け合い、励まし合いながら、核兵器も原発も、そして戦争もない社会をつくっていききたいと思います。柴野さんが大切にしていた詩の一節を紹介します。「あの遠いざわめきを誰が聞き分けられようか 一つの世界が生まれ出るのか それともいま、未来が死んでいくのか」私たちはどんな未来を選ぶのか。問い続けていきたいと思っています。

「いのちを守る立場から、核政策を問い直す」

中里 美郷

医療の仕事は、どんな命も大切にし、どんな立場の人も見捨てないことを前提にしています。病氣や怪我をした人だけでなく、社会の中で声を上げにくい人、傷つきやすい立場にある人の命や尊厳を守ること、医療の大切な役割です。しかし核政策は、核エネルギーや核兵器のために、特定の地域や人びとに犠牲を押しつける構造を持っています。ウラン採掘、原発立地、核実験、核のごみの処分まで、社会の中で弱い立場に置かれた地域が「仕方のない犠牲」とされてきました。

2011年の福島第一原発事故では、主に首都圏で消費される電力を生み出していた原発によって、福島の人たちが暮らしを奪われました。避難生活の長期化や避難者への偏見、風評被害も続いています。北海道の寿都町では、最終処分場をめぐる文献調査への応募によって地域の分断も起きています。交付金や過疎化、財政難の中での原発・核ごみの受け入れは、本当に「自由な選択」なのでしょうか。

原発の電力は都市で使われ、リスクや廃棄物は人口の少ない地域に押しつけられる。長野県も無関係ではありません。柏崎刈羽原発で事故が起これば、飯山市や栄村、野沢温泉村の一部も避難圏に含まれます。高齢化した地域で、大雪の中でも本当に避難できるのでしょうか。一方で私たちは、原発の電力を利用することで、他の地域にリスクを負わせる側にもなっています。便利さの裏側で、ウラン採掘の現場では被ばくに苦しむ人がいます。

私たち医療従事者は、誰かの命や健康が犠牲になることを前提とした仕組みを、「仕方がない」と受け入れるわけにはいきません。命を守る仕事だからです。便利さのために、誰かが被ばくし、誰かの故郷が失われ、誰かの地域が分断される社会でいいのでしょうか。命を守る者として、誰かの命や尊厳の犠牲の上に成り立つ社会を「仕方がない」で終わらせず、問い続け、変えていきたいと思っています。

